

# 幼児期の子どもの描く人物画に見る男女の違い

長谷川 悦子\*

言葉の発達途上にある幼児期の子どもにとって、絵を描くという事は、日常の一部であり、表現の手段の一つとしても大きな役割を持っている。また、子どもの絵の表現の発達は、一般的な心身の発達と深い関係があるとされている。(谷川 2001)本研究では3歳2か月～6歳2か月の幼児期の子どもの描く人物画に着目し、年齢・性別における描画発達と、聞き取り調査から見える男女の差に焦点を当て、図式期以前のなぐりがき期、象徴期では見られなかった男の子っぽい絵・女の子っぽい絵の出現する要因の一つであると考えられている性差について、“子どもはどのように男女の差を認識し、表そうとしているのか”，を探る事を目的とした。その結果、3歳児においては、描かれている項目数における男女差はほとんど見られない事が分かり、4歳男児を除いては、男児・女児共に自分と同性の人物画の描画項目数が高い傾向が見られた。また、自分の性別を正しく答えられた幼児に対し行った、「どうして、自分の事を男の子/女の子だと思いますか？」との質問に対する回答では、男女の体の機能的な違いや性別による性質の傾向の違いを挙げる回答は男児に多く見られ、男児は女児よりも身体の機能的な違いによる性別の認識が早い事が示された。

Key Words : 幼児, 人物画, 男女の差

## I. はじめに

幼児期の子どもの絵から見える男女の違いとしては、好んで描くモチーフの違いや、色の違い、描く内容の違いなどが挙げられる。子どもの絵の描画発達段階において一般的に目に見える形で男女の絵に違いが出てくるのは、図式期にあたる4歳～8歳であるとされている。図式期以前の、なぐりがき期、象徴期では見られなかった男の子っぽい絵・女の子っぽい絵の出現する要因の1つとして、年齢による運動機能の発達や、描画発達の男女差が大きくなってきた要因として、子どもたちの生活環境や生活習慣の変化、およびそれら環

境因子の発達期の脳に対する影響などが考えられよう。(郷間・川越 2013)とされるように、環境(周りの声掛け)、遊びの種類、などの外的要因や男女の脳機能の違いが挙げられている。また、賀門・諏訪(2003)では、服や靴の色を例に挙げ、実際の保育の現場では無意識のうちにジェンダー的なバイアスがかかっている事を指摘している。これらの事を踏まえた上で、本研究では、一人の子どもが、自分の性別と同じ人物を描いた絵と自分の性別と異なる人物を描いた絵に焦点を当て、描く内容の違いを比較し、描かれた絵にはどのような男女の相違点・共通点などが見えるのかを探り、年齢による描画能力の差異と性別による差異について調査するものとする。また、描画の調査

\*人間学部

と合わせて子どもの性自認についても聞き取り調査をする事で、子どもが自分の性別を認識している事と、描かれる絵との間にどのような関係があるのかについても調べていきたい。

調査方法は、男児・女児がそれぞれに描いた男女の人物画の比較をすると共に、子ども自身に性別を問うことで、自認を確かめ、性別を正しく答えられた幼児に対しその理由を質問する方法を取り、幼児期の子どもが答えた男女の違いを認識する理由から、幼児は男女の違いについてどう捉えており、それをどのように人物画に表現しているのかを掴むことが出来るのではないかと考えた。人物画を題材として選んだ根拠は以下の3点である。

- ・人物は、最もありふれた描画対象のひとつであり、子どもがよく描く題材なので、課題として与えた時に抵抗なく描きやすい事
- ・人物画を構成する要素の多さは、描かれた人物画を項目ごとに分け、分類をしやすい事
- ・今回のテーマである、「幼児期の子ども絵に見る男女の違い」において、性別による差異の意識を調査するに当たり、幼児が自分と同性の絵を描いた時と、異性の絵を書いた時との比較が可能である事

また、性自認の定義・何を持って性自認とするかについて、大滝（2006）の、幼児の性自認について3歳児のクラスにおいて幼児に対し「オトコノコ／オンナノコ」と呼びかけをして振り向いたことを性自認と定義した研究では、保育者による統制が働き、結果に反映されることも考えられる。とされた事から、今回は絵を描いた幼児に直接「あなたは男の子ですか？女の子ですか？分かりませんか？」との3択の質問をし、自分の性別と答えが一致することをもって、性自認をしていると定義する事とした。また、自分の性別と答えが一致した子どもに対し「どうして、自分の事を男の子／女の子だと思いますか？」と質問する事で、子どもが性別（男の子と女の子の違い）に対してどのような認識しているのかを調査できるのではないかと考え、調査対象の幼児に質問をする事とした。

## II. 方法

### II - 1) 対象

本研究は、東京都港区立I保育園の3歳2か月～6歳2か月の幼児62名を対象とした。内訳は以下の通りである。

- 3歳児クラス（男児9名・女児10名）
- 4歳児クラス（男児12名・女児9名）
- 5歳児クラス（男児10名・女児12名）

### II - 2) 期間

平成28年5月～6月の間の8日間、年齢ごとに各日5～8名程度に絵を描かせた。

### II - 3) 使用する道具

八つ切り画用紙1枚、16色クレヨン（全員同じもの）

画用紙のサイズは保育園での描画時に使っているサイズを使用し、クレヨンは幼児が日常で使っているものを使用する事とした。

### II - 4) 調査方法と質問内容

1. 各クラスで5～6名ごとに幼児を集め、一人ずつ画用紙を渡して、「男の人と女の人を一人ずつ、頭から足まで描いて下さい」と声掛けをして画用紙に人物の絵を描かせる。
2. 描き終わった子どもに、以下の質問をし、記録を取る。
  - ①誰を描きましたか？
  - ②あなたは男の子ですか？女の子ですか？わかりませんか？
3. 次に、②の質問で自分の性別と答えが一致した子どもに対して、
  - ③どうして、自分の事を男の子／女の子だと思いますか？との質問をして答えを記録する。

### II - 5) 描かれた絵の分類

子どもに描かせる人物画は、一種の動作性の知能検査として利用される事がある。特にフロレンス・グッドイナフ（1886-1959）によって考案さ

れたグッドイナフ人物画検査が有名である。今回の調査では、知能テストやボディーイメージ・空間認知などに関する発達調査が目的ではないが、子どもの描いた人物画を描かれた項目の数で分類をする事により、男女の絵の違いを数値化し、表すことを試みる。今回の調査で使用する項目は、グッドイナフ人物調査で使用される項目を参考にして作成する事とした。項目は以下16項目である。  
**頭・目・鼻・口・耳・まつ毛・眉毛・髪の毛・首・胴体・腕・手・脚・足・装飾・服**

これらの項目が描かれているかを調査し描かれている項目を数値化した表を作成する事とした。

### II - 6) 人物画の分析方法

16項目の判断基準は以下の通りである。

- ①**頭**・輪郭線で区切られて胴体と区別できることを基準とした。
- ②**目の有無**・片方でも描かれていれば目ありとした。
- ③**鼻の有無**・どんな形でもよいとした。
- ④**口の有無**・どんな形でもよいとした。
- ⑤**耳の有無**・頭の両側または片側に耳があるもの耳ありとした。
- ⑥**まつ毛**・目から直接描いてあるもの、または目から離れたまぶたのあたりから描いてあるものをまつ毛ありとした。
- ⑦**眉毛**・目の上の眉毛の位置に描いているものを眉毛とした。
- ⑧**髪の毛**・一本でも描かれていけば髪の毛ありとした。
- ⑨**首**・胴体と比べて細くなっている、服にラインで区切られている、頭と胴体をつなぐ位置に描いているもののうち、どれか1つにあたるものを首とした。
- ⑩**胴体**・首の下の体の位置に描かれたものを胴体とした。
- ⑪**腕**・胴体にくっついて描かれているもの、肘からうえ、肘から下にあたるものを腕とした。
- ⑫**手**・腕と区別され、腕から先の部分として描かれたもの、指が描かれたものを手とした。
- ⑬**脚**・太ももから下の足首までの部分とした。
- ⑭**足**・脚と区別され、足首から先の部分として描いたもの、靴やラインで脚と区別されたものを





足とした。

⑮**装飾**・リボンや、帽子、ネックレスなど服以外のものを装飾とした。

⑯**服**・胴体とは別の色で描かれているもの、単色でも線で胴体や脚と区別されているものを服とした。

分析例として、実際の幼児の絵を用いて項目を示したものが次の、表1である。

表1 各項目分析例

	描画あり	描画なし
 3 - C 4歳男児	頭・目・ 鼻・口・ 髪・足	耳・首・ 胴・腕・ 手・脚・ 眉・ まつ毛・ 装飾・服
 4 - I 4歳7か月男児	頭・目・ 口・髪・ 胴・腕・ 脚・足・ 服	鼻・耳・ 首・手・ 眉・ まつ毛・ 装飾
 4 - e 4歳8か月女児	頭・目・ 口・まつ 毛・胴・ 腕・脚・ 足	鼻・耳・ 髪・首・ 手・眉・ 装飾・服
 5 - i 5歳7か月女児	頭・目・ 口・耳・ 髪・胴・ 腕・手・ 脚・足・ 装飾・服	鼻・眉・ まつ毛・

### Ⅲ. 結 果

#### Ⅲ - 1) 人物画と判断が付かない絵の数

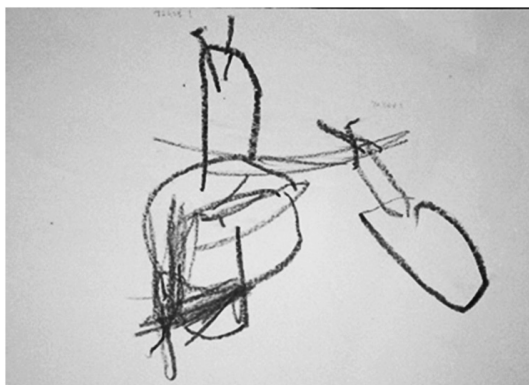


図1 3歳10か月 男児



図2 3歳9か月 女児

今回の調査において、3歳児、4歳児の描いた絵の中には、上記に定めた分類による人物の描出にならなかった絵も見られた。人物画としての要素が見られなかったもの（以降錯画と表記する）の内訳は、3歳男児・9名中5名、3歳女児・10名中2名、4歳男児・12名中4名、対象児全体（62名）に占める割合としては約12%となった。人物画として判別がつかなかった絵の描画例は図1、図2、の通りである。

対象とした幼児の、調査を終えた時点での月齢は、3歳児クラス（以降3歳と記載する）、4歳1ヶ月～3歳2ヶ月、4歳児クラス（以降4歳と記載

する）、5歳2ヶ月～4歳3ヶ月、5歳児クラス（以降5歳と記載する）、6歳2ヶ月～5歳3ヶ月であったが、錯画を描く子どもの特徴としては、男女ともに月齢の低い子どもであるという傾向が見受けられた。また、全体に加齢とともに描かれる人物画は詳細なもの（描かれる項目が多いもの）が多くなる傾向が見られたが、男児の方が錯画を描く割合が高く、4歳では男児のみに錯画が見られる事から、3歳～4歳の幼児期においては男児よりも女児の方が詳細な人物画を描く傾向がうかがえる。

#### Ⅲ - 2) 描かれた項目数から見える男女の差

表2・表3は、描かれた項目の数を、年齢・男女別に身体各部描画率を表したものである。なお、先に記述した錯画にあたる絵については、対象としない為、（ ）内に調査対象人数を記載した。男児の描いた絵において頭は、3歳児の80%、4歳・5歳児の100%に描画が見られた。年齢ごとに増加したのは、目・口・胴であり、4歳児から出現し5歳児にかけて増加したのは、腕・服で、5歳児から出現したのは、首・装飾となった。どの年齢においても出現が無かったのは、耳・まつ毛であった。女児の描いた絵では、頭・目は全ての年齢において100%描画しており、年齢ごとに増加したのは口・髪・胴・服となった。4歳児から出現し5歳児にかけて増加の傾向にあったのは腕・足・手・装飾、5歳児まで出現しなかった項目は無かったが、“鼻”については、男性/女性の両方の絵において、3歳児13%、4歳児22%、5歳児0%となっており、5歳児では描画が見られないという結果となった。

表4は今回設けた16項目について年齢・性別ごとの描画項目数の平均値を表したものである。この表からは、3歳男児を除いて男児・女児共に自分と同性の絵の方が、描かれた描画項目数の平均値が高いという事から、認識を持って男性/女性の描き分けを試みている事が示された。また、年齢が上がるごとに男児・女児の間に平均値の開きが見られる事からは、4歳～5歳の幼児においては男児よりも女児の方が詳細に人物画を描く事が見て取れる。

表2 男児の年齢別身体部位描画率（出現頻度順）

		100~90%	90~80%	80~70%	70~60%	60~50%	50~40%	40~30%	30~20%	20~10%	10~0%
3歳 (5名)	女性		頭目		脚		鼻 髪 足	口 胴			耳首腕 手まつ毛 眉裝飾服
	男性		頭目脚		髪		鼻 足	胴	口		耳首腕 手まつ毛 眉裝飾服
4歳 (9名)	女性	頭目		口 脚		胴	髪		腕足	鼻 服	耳首手 まつ毛 眉裝飾
	男性	頭目		口 脚	胴			髪	鼻腕 足服		耳首手 まつ毛 眉裝飾
5歳 (10名)	女性	頭目 胴服	髪 脚	腕	足			首	鼻手	裝飾	耳まつ毛 眉
	男性	頭目 胴服 髪	腕		足			首手	鼻	眉 裝飾	耳まつ毛

\*表2・3共に%は未満〜以上で表した。

表3 女児の年齢別身体部位描画率（出現頻度順）

		100~90%	90~80%	80~70%	70~60%	60~50%	50~40%	40~30%	30~20%	20~10%	10~0%
3歳 (8名)	女性	頭目		口	脚			髪 胴		鼻 服	耳首腕 手まつ毛 眉裝飾服
	男性	頭目		口				胴脚	髪	鼻 服	耳首腕 手足 まつ毛 眉裝飾服
4歳 (9名)	女性	頭目 口		髪	胴脚	腕 服	足	まつ毛	首手 裝飾 鼻		耳首手 まつ毛 眉 裝飾
	男性	頭目	口	髪	脚	腕 服	足	胴	手鼻	首 裝飾 まつ毛	耳眉
5歳 (12名)	女性	頭目 口 胴 裝飾 服	腕		足	手 まつ毛				耳 首	鼻眉
	男性	頭目 口 髪 服		腕	足	手				眉 首 裝飾	耳まつ毛 鼻



表4 年齢・性別ごとの描画項目数平均値

	3歳女兒	3歳男児	4歳女兒	4歳男児	5歳女兒	5歳男児
女性の絵	4.4	4.8	7.8	5.2	10.6	8.5
男性の絵	4	4.5	7	5.4	9.4	9.3

Ⅲ - 3) 誰を描いたのか

表5 描かれた男性像の分類

誰を描いたか。(男性の絵)(人)							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
3歳男	2	0	0	0	0	0	2
4歳男	1	0	1	0	0	1	6
5歳男	3	2	0	4	0	1	0
3歳女	/	5	1	1	0	1	0
4歳女	/	4	0	1	0	1	3
5歳女	/	3	1	2	0	1	5

表6 描かれた女性像の分類

誰を描いたか。(女性の絵)(人)							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
3歳男	/	1	0	0	1	0	2
4歳男	/	1	1	0	1	0	6
5歳男	/	4	0	5	1	0	0
3歳女	0	5	2	1	0	0	0
4歳女	2	2	1	0	0	1	3
5歳女	4	2	0	0	0	1	5

描かれた人物は、①自分、②父／母、③兄弟姉妹、④友達、⑤先生、の他に、お姫様・レーサー・おばけ・などの、⑥架空のものやあこがれの人物、誰でもないとする、⑦特定の人物ではないもの、の7つに分類する事ができた。

表5・表6は、描かれた男性像、女性像を①～⑦の項目に分類したものである。年齢別身体部位描画率と同様に、錯画は対象としないため、調査対象は錯画を除いた人数とする。

Ⅲ - 4) 性自認の有無によって描かれる絵に違いがあるか

今回の調査では、全体の約94%にあたる58名の幼児が自認ありとなった。自認なしと判断された子どもは3歳児のみで内訳は男児1名女児4名となっており、女児に多い傾向が見られ、いずれも月齢の低い子どもであることが分かった。また、自認なしとなった子どものうち、錯画判定となったものは女児2名男児1名の合計3名であり、5名中3名が人物の描出に至らなかった。人物画の描出に至った女児2名については、今回の3歳女児描画数平均値(表4参照)の以上と以下1名ずつであった。錯画数が半数以上となった事、今回の調査方法で得られた自認無しの人数が少ない事から、幼児に直接性別を問う事で得られた性自認の有無の結果と描かれた絵を結び付けての判別は難しい結果となったと言える。

Ⅲ - 5) 自分の事を男の子／女の子だと思う理由

得られた回答をもとに理由を次の(1)～(7)に分類したものが表7である。

(1)髪の毛が長い／短い・(2)体の違い・(3)性質・性格の違い・(4)色に関する違い・(5)他者からの影響・(6)服・(7)その他・(8)わからない

表7 自分の事を男の子／女の子だと思う理由(人)

理由	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
3歳男	1	0	0	1	0	0	0	3
4歳男	1	3	0	0	2	0	0	3
5歳男	2	2	2	0	1	0	1	2
3歳女	2	0	0	1	0	0	0	3
4歳女	2	0	0	0	1	0	1	5
5歳女	4	1	1	0	1	3	0	2

数字は人数を表したものとする。錯画判定及び自認無しとなった人数を除くので、3歳児については男児4名女児6名、4歳男児は9名を調査対

象とした。自分の性別を正しく答える事ができた幼児に対し、“どうして、自分の事を男の子／女の子だと思えますか？”と質問した結果、回答として、全年齢において、髪の毛の長さの違いが挙げられた。3歳児4歳児においては、男女ともに「わからない」の回答が多く見られたが、4歳児、5歳児の回答には、「お家の人が決めた」「生まれる前から決まっていた」「弟がいるから」などの他者からの意見や影響が見られるものや、「ピンクが好きだから」「男の子と女の子では好きな色が違うから」など、色による男女差の認識をうかがわせるものが挙げられ、「おっばい／おちんちん、がある／ない、から」などの子どもなりに感じている男女の体の機能的な違いを挙げる回答は4歳・5歳に見られた。5歳女児には「服による違い」が多く挙げられた。また、「男の子は暴れんぼうで女の子はふつう」「好きなテレビが違うから」などの性別による性質の傾向の違いを挙げる回答は5歳児にのみ見られた。その他には、「女の子だから」「神様が決めたから」などのあいまいな回答も全年齢において見られた。

#### IV. 考察

##### IV-1) 人物画から見られる男女の差（錯画と描画率）

上記の結果を踏まえて、人物画に見る男女の差について考えると、まず挙げられるのは、男児・女児の錯画の数である。今回の調査では、3歳男児・5名、3歳女児・2名、4歳男児・4名、となったわけであるが、女児よりも男児の方が錯画の数が多く、また男児は4歳においても錯画の出現があった事からは、調査の対象とした3歳～5歳の幼児においては男児よりも女児の方が描画発達の早い傾向がうかがえた。描かれた人物画項目数については、全体を通して、年齢と共に描かれる項目は増加する傾向が見られ、男女共に描画発達に即した結果が得られたといえる。3歳では、男児・女児の描画項目数にそれほどの開きは見られなかったが、4歳・5歳では男児は女児に比べて、手・髪・服・装飾に関する認識が弱い事が示された。また、男児の絵に耳の出現が見られなかった

事は、“男子は髪が短いために耳が目立って見えるので、それに対する注意が喚起されることとなる”（古賀 1971）としたものとは異なる結果となった。女児については、男児に比べて描画項目数が多い事に加え、4歳には22%の描画率であった鼻が5歳では描画なしとの結果となった。顔のパーツである目・口・まつ毛・髪の描画率が高い事から、頭部に関する意識が高い事、4歳の段階で服の描画率が高い事からは、服に関しても意識が高い事がうかがえた。また、鼻の描画が5歳児では見られなかったことについては、三浦・渡邊（2005）でも報告されており、「描画の中で女性的な表現がではじめる年長女児で鼻の描画率が低下したことは、性意識の発達を見る上で興味深い結果と考えられる」とされている。今回の結果では耳について、5歳では男児の方が描画率の高い事からケログ（1971）が示した、「鼻は力や男根を象徴すると考えられている。」との見解と一致する結果となった。この事は、後に記載する、自分の事を男の子／女の子だと思う理由として、男女の体の機能的な違いを挙げる回答は男児に多く見られた事とも関連付けられるだろう。

##### IV-2) 描かれた人物から見える男女の差（誰を描いたのか）

①自分 与えられた指示に対し、「男の人／女の人」として自分を描いた絵は男児では全年齢で現われ年齢ごとに、3歳50%・4歳約11%・5歳30%という割合で、女児では4歳から現れ、4歳約22%・5歳約33%となった。この事から、今回の調査では男児の方が自分の事を男の人として描いた年齢が女児よりも早い事が表され、男児・女児の両方において年齢と共に自分に対して、「男の人／女の人」の認識が高まる事が示された。

②父／母 父を描いた男児は5歳にのみ見られた。女児は全年齢で見られ、中でも3歳が最も多く3歳女児の約62.5%が描画し、年齢が上がるごとに減少の傾向が見られた。母を描いた男児は全年齢見られ、年齢と共に増加する傾向であった。女児でも同様に全年齢で見られたが、年齢と共に父／母の描画が減少の傾向で、男児

は3歳では母のみだった描画が、5歳には父／母が増加した。このことから、女兒は父／母の両方に対して、「男の人／女の人」として認識し始めるのが早いともいえる。

- ③**兄弟姉妹** 男性の絵では、4歳男児・3歳女兒においてのみ見られ、女性の絵では3歳・4歳女兒と4歳男児に見られた。
- ④**友達** 男性の絵では、友達を描いた男児は5歳にのみ出現し、40%の出現率となった。女兒は、全年齢で現れた。女性の絵でも、男児は5歳にのみ現れ、50%と高い出現率であった。女兒は3歳にのみ現れる結果となった。
- ⑤**先生** 男性の絵においては男児・女兒共に出現は無かったが、今回調査の対象としたクラスにおいて男性の先生は4歳児クラスに1名だったという事が影響していると考えられる。女性の絵においては、全年齢で男児のみに描画が見られ、女兒には見られなかった。
- ⑥**架空のものや憧れの人物** 男性の絵において、男児では4歳から現れ、女兒では全年齢で見られた。女性の絵においては、男児では4歳から現れ、女兒では出現は見られなかった。
- ⑦**特定の人物ではない者** 男性の絵／女性の絵の両方において、男児では3歳・4歳で見られ、特に4歳では多く67%が⑦を描く結果となった。女兒では4歳・5歳で見られ、5歳においては約42%の幼児が⑦を描く結果となった。

#### IV - 3) 性自認と幼児が答えるその理由

今回の調査で得られた幼児の性自認の理由からは、まず、自分の性別を答える事は出来たが、その理由は分からないとした子どもが多い事が挙げられる。これには、日常生活の中で、男の子／女の子として扱われることで、自分の性別を認識していること、幼児には答えるのが難しいこと、の2つの要因が考えられるわけであるが、他者からの影響を理由とした回答は、4歳から男児・女兒で見られたが、4歳男児を除いては10%以下の割合となり、目立って多くはない。加えて色の違いを理由に挙げたのは3歳児のみで少数であった事からは、一般に男女差の要因として挙げられる、環境（周囲の声掛けなど）や、与えられるおもちゃ

や持ち物の色などに見られるジェンダー的なバイアスは、幼児はあまり自覚していないとも言えるのではないか。次に、男女の体の機能的な違いを挙げる回答は男児に多く、4歳・5歳に回答が見られた。この事からは、男児は女兒よりも身体の機能的な違いによる性別の認識が早い事が示された。また、Ⅲ - 4) で自認無し、と判断された幼児の内訳が5名中男児は1名のみであった事からも、男児は女兒よりも性別の認識を持つのは早い傾向にあると言える。次に、男女共に髪の毛の長さを男女の違いの基準として認識している事が挙げられる。特に女兒に多く回答が見られた事、女兒の描く人物画において髪の毛の描写が細かい傾向が見られた事、から女兒にとって髪は性別の判断基準として大きな位置づけにある事がうかがえた。

#### V. まとめ

今回の調査では、人物画に見る男女の描画発達の違いについては、描かれた項目数の平均値や描画項目の比較から、男児より女兒の方が描画発達の早い事が認められた。子どもが性別（男の子と女の子の違い）に対してどのような認識でいるのか、については、3歳児4歳女兒においてわからないとの回答が多くみられたが、4歳男児、5歳児においては、性自認と結びつきの深いとも言える男女の体の機能的な違いを挙げる回答や、性質の違いを挙げる回答を得る事が出来た。このことから幼児に自認の理由を問う事で、子どもが感じている男の子女の子の違いについて知る事ができると言える。

“子どもはどのように男女の差を認識し、表そうとしているのか。”について、今回の調査では、一人の子どもが、自分の性別と同じ人物を描いた絵と自分の性別と異なる人物を描いた絵に焦点を当てた訳であるが、男女の描き分けは、男児・女兒共に年齢が上がるごとに増加し、自分と同性の人物を詳細に描く傾向にある。表3に見る通り、5歳女兒において、装飾やまつ毛などの有無による男女の描き分けが見られる結果となった。表3の描画率からは、年齢が上がるごとに女兒は、顔のパーツである目・口・まつ毛・髪の毛の頭部に関する



る意識が高い事、4歳で服、5歳では装飾への意識が高いという事が言える。この事と、5歳女兒が自分の事を女の子だと思ふ理由として(1)髪が長い／短いから、(6)服、が多く挙げられた事を照らし合わせると、5歳女兒において、装飾やまつ毛などの有無による男女の描き分けが見られる背景には、女兒が自分で感じている性差を人物画に表わした事が一因と考えられる。

## VI. 今後の課題

今回の調査で、男児についても描き分けは、年齢が上がるごとに増える傾向であり、表2に見る通り、5歳男児においても女兒程の描き分けの男女差は無いものの、描き分けは見られ、女兒と同様に自分と同性の人物の描画項目数が多い傾向であった。しかしながら今回5歳男児が自分の事を男の子だと思ふ理由として挙げている(2)体の違い(3)性質・性格の違いが人物画に現れている事に関連づける事は困難な結果となった。今回得られた、自分の事を男の子／女の子だと思ふ理由を人物画以外の絵との比較や、ほかの調査方法を持って、“子どもはどのように男女の差を認識し、表そうとしているのか”を明らかにしていくことは今後の課題としたい。

## 引用文献

郷間英世・川越奈津子・立田瑞穂・中市悠・郷間安美子・鈴木万喜子・落合利佳(2013). 最近の子どもの描画発達の男女差についての検討, 京都教育大学紀要 122, pp101-107.  
 古賀行義(1971). 子どもの人物画, 建帛社, p20.  
 谷川渥・小沢基弘・渡邊晃一(2001). 絵画の教科書, 日本文教出版, p376.

## 参考文献

賀門康博・諏訪きぬ(2003). 幼児期の性差観の変容に関する考察～子どもと色と性差～, 日本保育学会大会発表論文集 2003.  
 三浦由梨・渡邊加礼・渡邊タミ子・大山健司(2005). 幼児期女兒の描いた人物画によるボディイメージ発達の研究, 山梨大学看護学会誌 3(2).

大友茂(1968). 人物画による性格診断法(増補版), 黎明書房.

大滝世津子(2006). 幼児の「性自認時期」と「対人スタンス」との関係—幼稚園3歳児クラスの観察から—, 東京大学大学院教育学研究科紀要 46.

R・ケロッグ(1971). 深田尚彦訳, 児童画の発達過程, 黎明書房.

## 謝辞

今回、調査にご協力いただいたI保育園の園長先生をはじめ、諸先生方、園児の皆様には心より感謝をいたします。

(2016.9.28 受稿, 2016.11.8 受理)